

和水町文化財調査報告 第1集

た て い し う ち だ み や や ま
立石城跡・内田宮山城跡

——（旧）菊水町所在の中世城跡——

2006年

く ま も と け ん た ま な ぐ ん な ご み ま ち き ょ う い く い い ん か い
熊本県玉名郡和水町教育委員会

和水町文化財調査報告 第1集

た て い し う ち だ み や や ま
立石城跡・内田宮山城跡

——（旧）菊水町所在の中世城跡——

2006年

くまもと けん たま な ぐん なご み まち きょう いく い いん かい
熊本県玉名郡和水町教育委員会

序 文

菊水町では、町史編纂事業の一環として、町内に残る中世城跡の調査を実施してきました。これまでに七城跡の調査を終え、三冊の報告書を刊行しましたが、今年度は、さらに、「立石城跡」と「内田宮山城跡」の報告を行うことになりました。

この間、菊水町は平成18年3月1日に隣接の三加和町と合併し、「和水町」が誕生しましたが、新町になりましても菊水町史編纂事業は継続し、18年度に『通史編』と『江田船山編』を発行することになっております。この二城跡の成果は、17年度分の『資料編』にも収録されておりますが、本報告書では、『資料編』に収録できなかった分も含めた内容になっております。一方で、次年度の『通史編』では、さらなる城跡の調査結果を加えた総まとめを行うこととなりますので、関係各位のより一層の努力を期待するところです。

本報告書によって、郷土に対する、さらなる理解が深まります事を祈念し、発刊の言葉と致します。

平成18年3月31日

和水町教育長 井 上 忠 勝

本文目次

第Ⅰ章 調査の概要	1
第1節 調査の組織	1
第2節 調査の進展	1
第3節 城跡の概要	3
1. 立石城跡	3
2. 内田宮山城跡	3
第Ⅱ章 調査の成果	4
1. 立石城跡	4
〔1〕立石城跡について	4
〔2〕測量調査	7
〔3〕立石城関連の石塔調査	13
2. 内田宮山城跡	17
〔1〕内田宮山城跡について	17
〔2〕測量調査	17
〔3〕城内にある石塔群（大五輪塔・五輪塔・板碑）調査	25
第Ⅲ章 まとめ	29
写真図版	31

挿図目次

第1図 熊本県玉名郡和水町位置図	1	第15図 坂梨城主子孫の石碑実測図	15
第2図 (旧)菊水町所在の中世城跡	2	第16図 石原家祖先の石碑実測図	15
第3図 立石城跡周辺地形図および字図	4	第17図 内田宮山城跡周辺地形図および字図	17
第4図 立石城跡周辺地形図	5	第18図 内田宮山城跡地籍図	18
第5図 立石城跡地籍図	6	第19図 内田宮山城跡周辺地形図	19
第6図 立石城跡全体測量図	8	第20図 内田宮山城跡全体測量図	20
第7図 立石城跡測量図①	9	第21図 内田宮山城跡測量図①	21
第8図 立石路跡測量図②	10	第22図 内田宮山城跡測量図②	22
第9図 立石城跡測量図③	11	第23図 内田宮山城跡測量図③	23
第10図 立石城跡測量図④	12	第24図 内田宮山城跡測量図④	24
第11図 立石さん実測図	13	第25図 石塔群実測図	25
第12図 五輪塔実測図	13	第26図 大永二年銘 大五輪塔実測図	26
第13図 立石城主の家来の墓実測図	14	第27図 永正十年銘 五輪塔実測図	27
第14図 刀研ぎさんの墓実測図	14	第28図 天文八年銘 板碑実測図	28

写 真 図 版

図版 1	立石城跡 遠景 北東側の上の原地区から望む	32
図版 2	立石城跡 北側の畑地から望む	32
図版 3	立石城跡 XI区北東隅 南→北	33
図版 4	立石城跡 XI区東側法面 北→南	33
図版 5	立石城跡 XI区 東→西	34
図版 6	立石城跡 「立石さん」に上る登城道	34
図版 7	内田宮山城跡 遠景 南東側から望む	35
図版 8	内田宮山城跡 主郭平場 北側から望む	35
図版 9	内田宮山城跡 主郭東下 小段 1 北→南	36
図版10	内田宮山城跡 主郭東下壁面（岩盤の削り落とし）	36
図版11	内田宮山城跡 主郭南下 小段 2	37
図版12	内田宮山城跡 主郭南端から南西下の堀切と土塁を望む	37
図版13	内田宮山城跡 主郭北下 南東→北西	38
図版14	内田宮山城跡 小段 2 に安置されている石塔群	38

例 言

1. 本書は、和水町教育委員会が菊水町史編纂事業の一環として実施した町内所在の中世城跡の測量調査の報告書である。
2. 今回の報告分は「立石城跡」と「内田宮山城跡」である。
3. 測量調査は、町史編纂副委員長の大田幸博氏(熊本県立鞠智城・温故創生館長)、石工みゆきさん、溝口真由美さん、益永浩仁で行った。同時に本書の執筆も同メンバーで行った。
4. 製図は石工さんと溝口さんが行った。
5. 本書の編集は益永・大田氏・溝口さんで行った。

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査の組織

調査主体	和水町教育委員会		
調査責任者	井上忠勝（教育長）		
調査者	大田幸博（町史編纂副委員長） 益永浩仁（総合教育課文化係参事）		
調査補助員	石工みゆき	溝口真由美	
調査事務局	宮地幸子（総合教育課長）	黒田裕司（総合教育課文化係長） 居石裕臣（総合教育課文化係参事）	
測量補助員	片岡靖臣	奥井 孝	

第2節 調査の進展

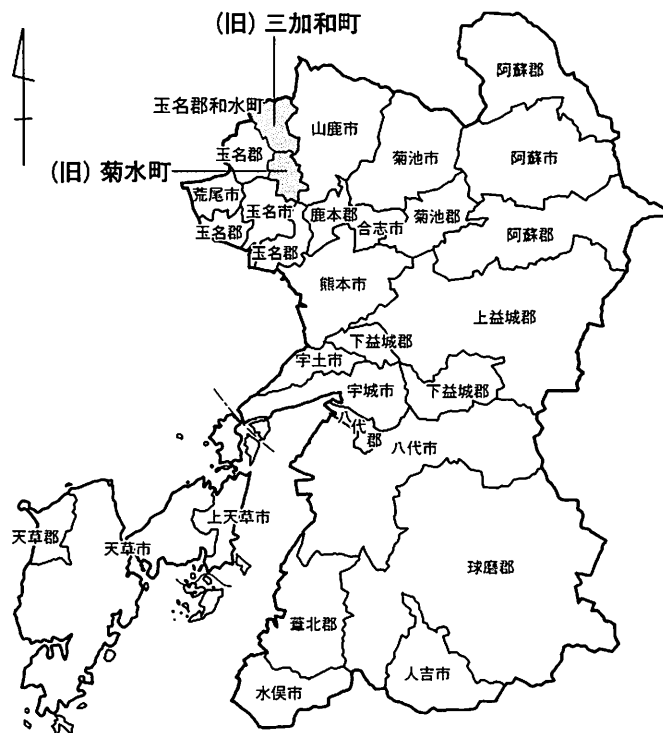
①今回の報告分は「立石城跡」と「内田宮山城跡」である。これらは九州自動車道（以下、自動車道と表記）によって、昭和40年代の後半に、城跡地の中心域を断ち切られているので、縄張りの把握が難しかったが、残存地形の測量に力を注ぎ、聞き込み調査や関連資料の収集も行った。

②立石城跡は県道16号（玉名・山鹿線）、内田宮山城跡は県道3号（大牟田・植木線）の各沿線に所在している。県道3号沿線では東方面から南関町側の北西方面に、萩原城跡～用木城跡～牧野城跡～小乙城跡～乙城跡～江田城跡～内田宮山城跡の調査が進展した。さらに、県道16号沿線では南西方面から山鹿市側の東方面に、立石城跡～焼米城跡の調査が進んだ。

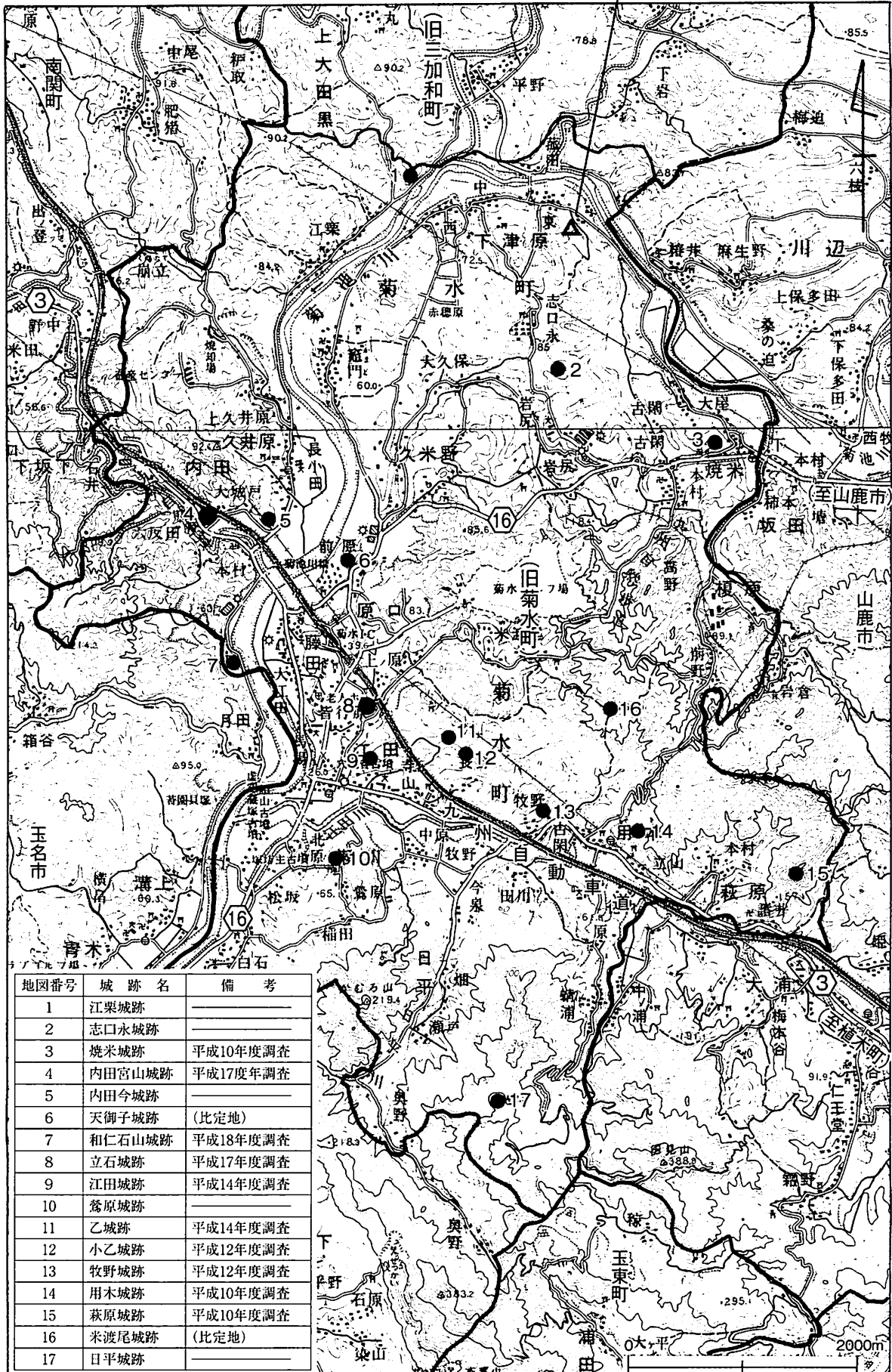
③これまでに合計9城跡の調査と資料整理が終了した。現在、新たに菊池川右岸に位置する和仁石山城跡を調査中である。広域的には県道3号

沿線の城跡となる。町内の中世城跡は17城跡とされるが、天御子城跡と米渡尾城跡は、先学者の思いも含まった比定地である。したがって、実態が明確なもので手付かずの状態は5城跡である。もっとも、その中には、大規模山城の日平城跡が残っており、次年度も、綿密な計画のもと、調査に取り組みたい。

④城跡調査の成果は、これまでに合併前の菊水町の文化財調査報告書に掲載すると共に、平成17年度は『菊水町史』の「資料編」にも掲載した。総括的な内容は、平成18年度に発刊予定の「通史編」に折り込むことになっている。



第1図 熊本県玉名郡和水町位置図



第2図 (旧)菊水町所在の中世城跡

第3節 城跡の概要

1. 立石城跡

【アクセス】

- ①江田^{えだ}の交差点から県道16号を北進すると1kmで自動車道をまたぐ⁴諏訪原橋^{すわのはる}となる。この橋の手前100mに熊本三菱ふそう^{（株）}玉名支店があり、ここから右折する形で町道が分岐している。200m進むと左手に立石公民館があり、町道は右方向に大きくカーブを描く。
- ②公民館から100m進むと、道の左脇に堀割^{ほりわり}の先端が顔を覗かせる。ここから登城道が城跡に上がり、町道の向きと堀割と城跡の丘陵地が並列する。
- ③100m進むと三叉路となる。道の分岐点は城跡の末端部で、左折した小道は城跡を包み込むように自動車道の肩部に上がっていく。分岐点から300m進むと丘頂域に出るが、ここには、右手に自動車道をまたぐ^{はら}原口橋^{ぐち}、左脇の軍人墓地に4基の墓碑がある。
- ④墓地は、丘頂の残存部にあり、立石城跡の最高所にあたる。原口橋は、対岸の上の原地区と城跡地の立石地区を結ぶ。

【概要】

- ①自動車道の建設時に、城跡の北東域を全て削り取られている。北東方向から南西方向へ伸びる帯状丘陵地の本体側（鞍部）を昭和40年代後半に、自動車道が突き抜けた。
- ②対岸の上の原地区から望むと、城跡は上の原地区よりも低い位置にあるが、やや小山状態にある事がわかる。自動車道は、本体丘陵地が一旦、高さを減じる鞍部箇所を掘削して通過した（地元の言）。
- ③城跡は墓所から南西方向に緩やかに下る傾斜地であるが、地元で「城跡」として認識されているのは、この主軸ライン（山で言う尾根筋）である。「野付^{のつけ}」と呼ばれており、今日、11段の連続した段状地形となっている。上段域は荒地で、中段から檜の植林地である。調査前は、全域で小竹や雑木が繁茂する所であった。典型的な平山城である。
- ④城跡の北域段下がりにも丘陵の広がりが見られるが、地形的に城としてのまとまりはなく、地元でも城跡とは伝えていない。

2. 内田宮山城跡

【アクセス】

江田の交差点から、県道3号を南関方面に2.5km進んだところに内田川をまたぐ内田橋がある。そこから100mの所に「内田宮前^{うちだみやまへ}」のバス停があり、三叉路を右折して、100m先に赤子宮^{せきしぐう}の鳥居がある。赤子宮の裏山が城跡で、自動車道の高架橋を近くに見る。自動車道を挟んだ東側対岸の隣接地に内田今城跡^{うちだいま}がある。

【概要】

- ①立石城跡と同じように、自動車道の建設によって城跡の北北東側を全て削り取られている。城跡は、二股に分かれた丘陵端部の南側小尾根を利用したものである。残存の丘頂域は旧地形の三分の一程という^{（注1）}。自動車道は丘陵の二股の谷部を突き抜けた。丘陵本体の鞍部は北北西側にあり、痩せ馬の背中^{（注1）}の形状を呈する。
- ②丘頂の南下に赤子宮（赤子宮大明神）がある。丘陵の斜面部を挟み取るように平坦地が造られており、南東端に前述の分岐道に下る石段がある。城跡との前後関係は不明であるが、位置的なものからも、何らかの繋がりが考えられる。

『熊本県神社誌』によれば、「内田吉見神社^{うちだよしみ}」とあり、鎮座地を菊水町内田709とし、大津山弾正が勧請して、大永2年（1522）に創建され、天正5年（1577）大津山新左が再興とある。祭は10月12日で、祭神は伊邪那岐命、外二神。

（注1）城跡の山頂部について 内田地区在の浦田敦實氏（89歳）の談。「城跡山頂の平場は、それ程広くなかった。工事によって三分の二程の平場面積が削り取られた」。

第Ⅱ章 調査の成果

1. 立石城跡

〔1〕立石城跡について

①県調査では、城跡参考地となっている（『熊本県の中世城跡』熊本県文化財調査報告 昭和53年）。

*「熊本県の中世城跡」から一部を抜粋

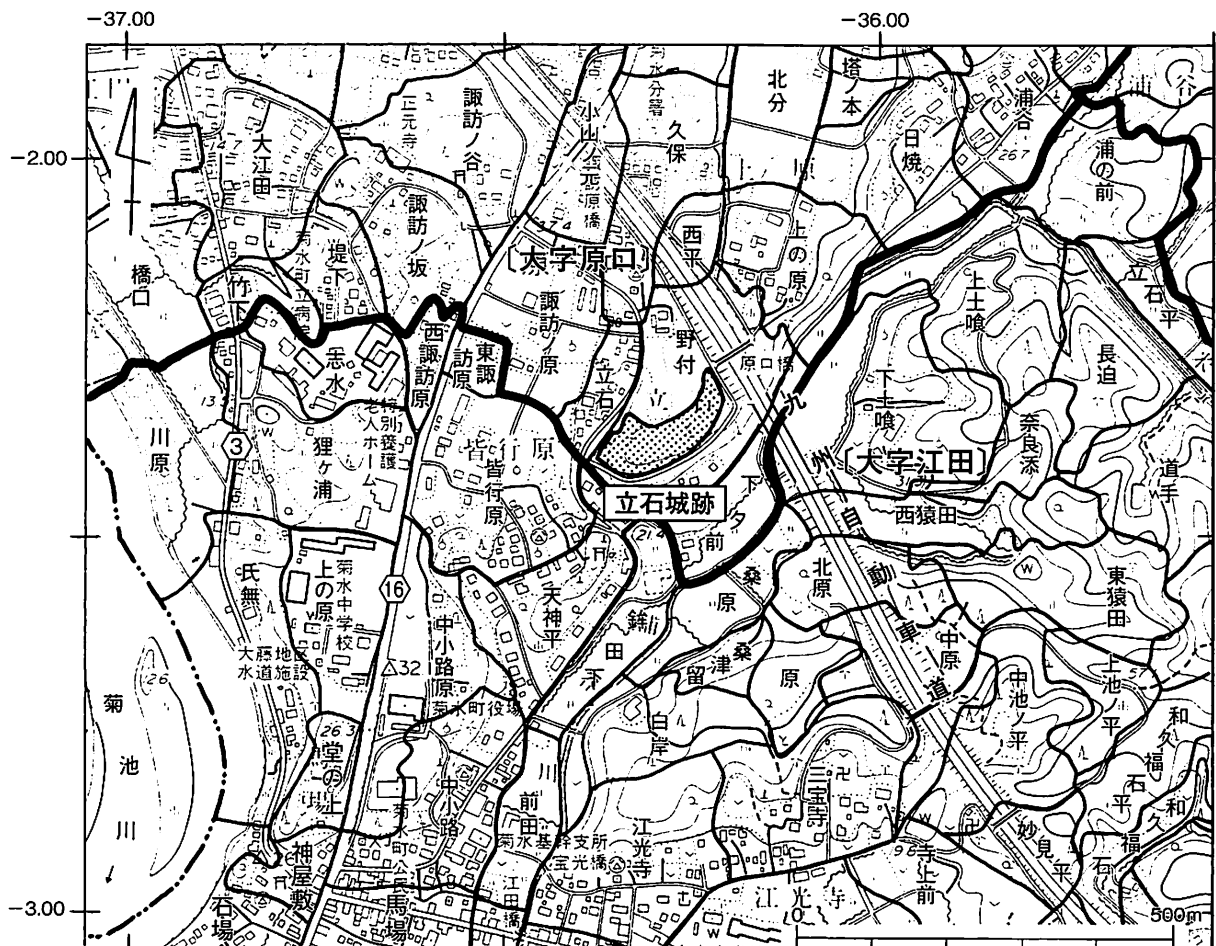
石原家の先祖は立石城主の子孫と刻む石碑がある。この事から原口地区の立石に城跡の存在が考えられる。野次山に「立石さん」と呼ばれる自然石が祀られている。住民には石原姓が多く、野次山を参考地とする。

②「石原家祖先は立石城主」と刻む石碑は、城跡から北北東方向に実質距離にして7.2km離れた下津原東区の墓地にある。県道194号から枝分かれして志口永地区^{しくちなが}へ向かう道路脇の小高い丘に建立されている。この石碑については、別項で述べる（→15頁）。

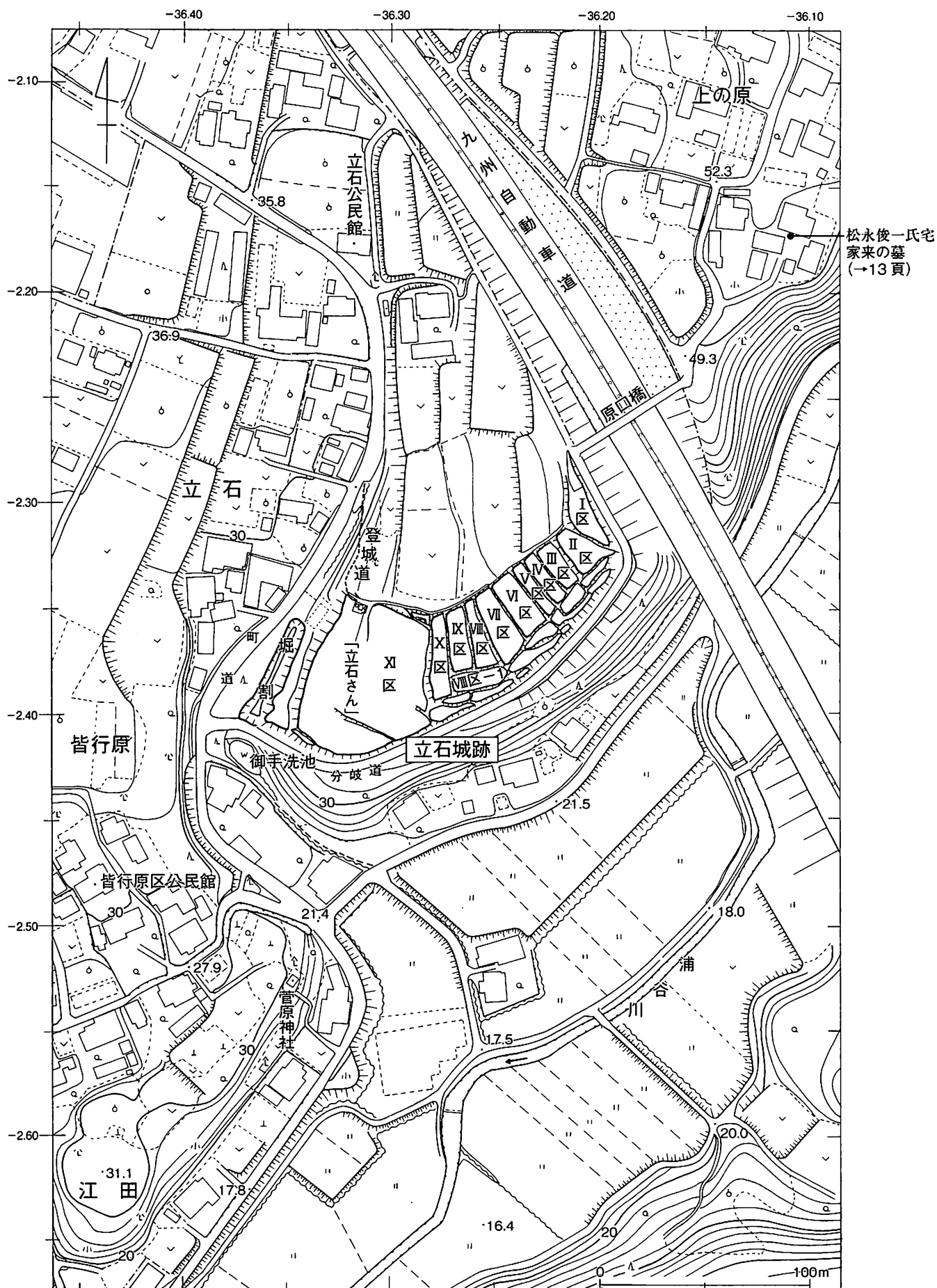
③自動車道を挟んで対岸する立石地区の上の原^(注2)の南西端部に松永俊一氏宅がある。この家の玄関横に「立石城主の家来の墓」と裏庭に「刀研ぎ^{かたなと}さんの墓」と呼ばれる石碑が祀られている。

④「立石さん」と称される石碑も、城跡の南西域に祀られている。立石地区の谷^な(注3)では石原姓が多く、一族で「立石城主の子孫」としての認識が強い。下津原東区の石碑についても、その存在がよく知られている。城内の「立石さん」の石碑は城跡のシンボルになっている。これら3基の石碑についても別項で取り上げた(→13頁)。

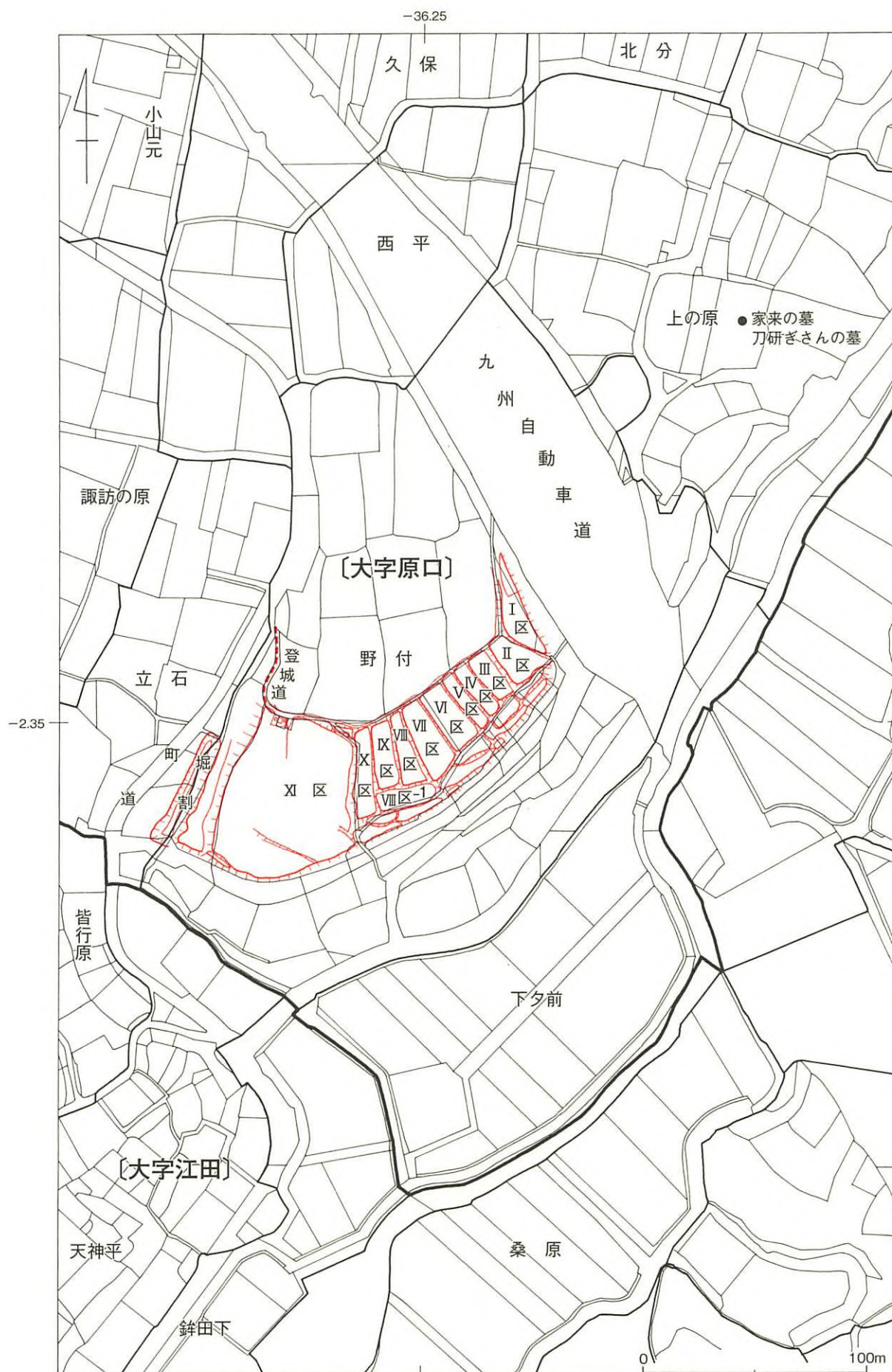
(注2・3)：立石地区では、丘陵地本体側の集落を「上の原」、石原姓の多い城跡麓を「谷」と呼び分けている。さらに城跡地の山を「野付」と称する。「谷」は麓集落である。



第3図 立石城跡周辺地形図および字図



第4図 立石城跡周辺地形図



第5図 立石城跡地籍図

⑤城跡裾部の溝は「堀割」と呼ばれる。さらに、城跡の末端部の三叉路下には溜池があり、通称「御手洗池」は「城主が手を洗った池」として伝えられる。地形的に堀割と一連のものである。

⑥『熊本県の中世城跡』は、消極的な報告内容で、参考地に留まっているが、今回の調査で城跡地としての確証を得ることができた。上の原の松永ヒサヨさんも「立石城の伝承」は松永家で代々語り継いできたと言われる。

⑦城跡の残存地形は、主軸ラインにおいてL字形の烏帽子の形状をなす。連続的に連なる削平地は、北北東側から南西側へ徐々に幅広くなり、最下位で一気に膨らむ。この区画は、やや隅丸の台形状平場（Ⅺ区）で北西縁の墓所に前述の「立石さん」石碑がある。

⑧城跡は、上位から下位にかけて帯状地形が階段状に連なり、かなり特異な縄張りである。さらに丘陵そのものは北西側へ緩慢な広がりを見せ、一帯が畑地となっているが、前述のように地元で城跡地としての認識はない。

〔2〕 測量調査

測量図にⅠ区からⅪ区までの番号を記して説明を行う。

①最高所のⅠ区が標高48.90m、下位のⅪ区が標高33.40mで、上下の平場で15.50mの比高差がある。城域の大きさを示す地図上での主軸ラインの直線距離は200m。Ⅰ区は小規模な軍人墓地で、4基の墓碑が建つ。南東側も古墓所であったと聞くが、墓碑も無く、面影はない。

②Ⅱ区～Ⅺ区は、自動車道建設工事の影響を受けていない。Ⅱ区・Ⅺ区は台形状、Ⅲ区～Ⅹ区は長方形をなす。各区の規模は下表の通り。

(単位：m)

区	長さ	幅	区	長さ	幅	区	長さ	幅
Ⅱ	18	7	Ⅳ	29	13	Ⅹ	38	8
Ⅲ	22	9	Ⅶ	32	13	Ⅺ	70	55
Ⅳ	22	9	Ⅷ	32	9			
Ⅴ	28	6	Ⅸ	28	9			

③Ⅱ区～Ⅹ区の比高差は下表の通り。

(単位：m)

Ⅱ区－Ⅲ区	1.49	Ⅲ区－Ⅳ区	1.08	Ⅳ区－Ⅴ区	0.65	Ⅴ区－Ⅵ区	0.92
Ⅵ区－Ⅶ区	1.55	Ⅶ区－Ⅷ区	0.88	Ⅷ区－Ⅸ区	0.95	Ⅸ区－Ⅹ区	1.54

④これらの東縁には、主軸ラインに沿う形で、今日、二段をセットとする小段が列をなす。もっとも、これら小段群は東下部を道路建設の際に削り取られているので、旧地形は不明。

⑤Ⅷ区－ⅠはⅧ区とⅨ区の東縁にあり、唯一、主軸の向きが異なる。形状は長方形で、25m×8m。Ⅷ区との比高差は1.5m。この区の南西隅に五輪塔の火輪などが残存する。城跡内における唯一の中世遺物である。

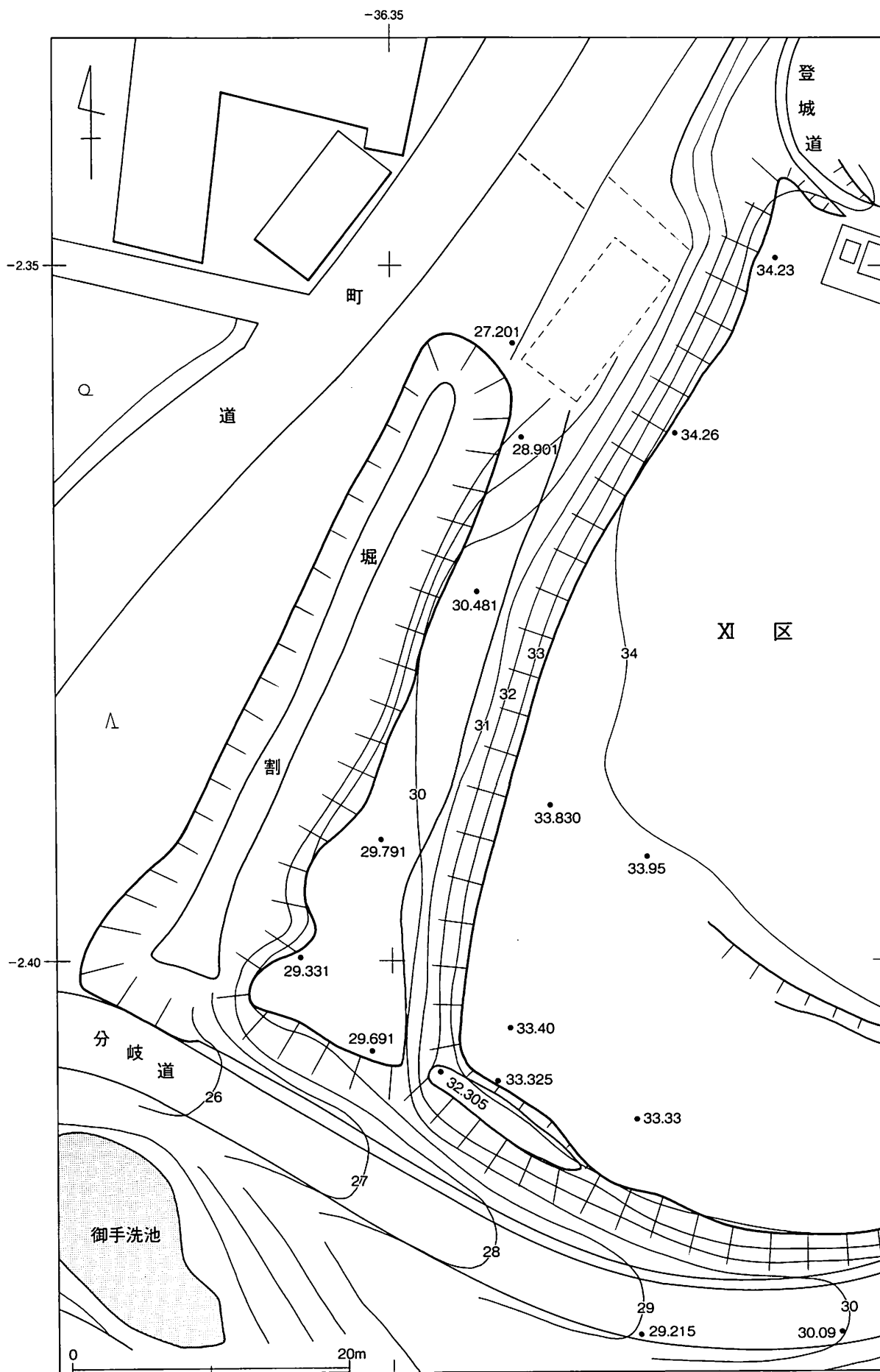
⑥Ⅺ区は城域の南端部にある。唯一の広い面積を有する台形状の平場で、東西幅55m、南北の長さ70m。Ⅹ区との崖面は急峻に削り落とされている。比高差は西側から東側へ4～2m程で、城跡地として最もインパクトを有する箇所である。平坦地であるが、元々、緩傾斜地が造成されているため、上下で2.6mの比高差が生じている。Ⅺ区北西隅に「立石さん」石碑が祀られている (注4)。

⑦「堀割」は全長54m、城跡の西裾部を町道に沿って走行する。南端で自動車道の取り付け道路を挟んで、前述した「御手洗池」がある。北端部から始まる登城道は、前述の「立石さん」石碑へ上がっている。

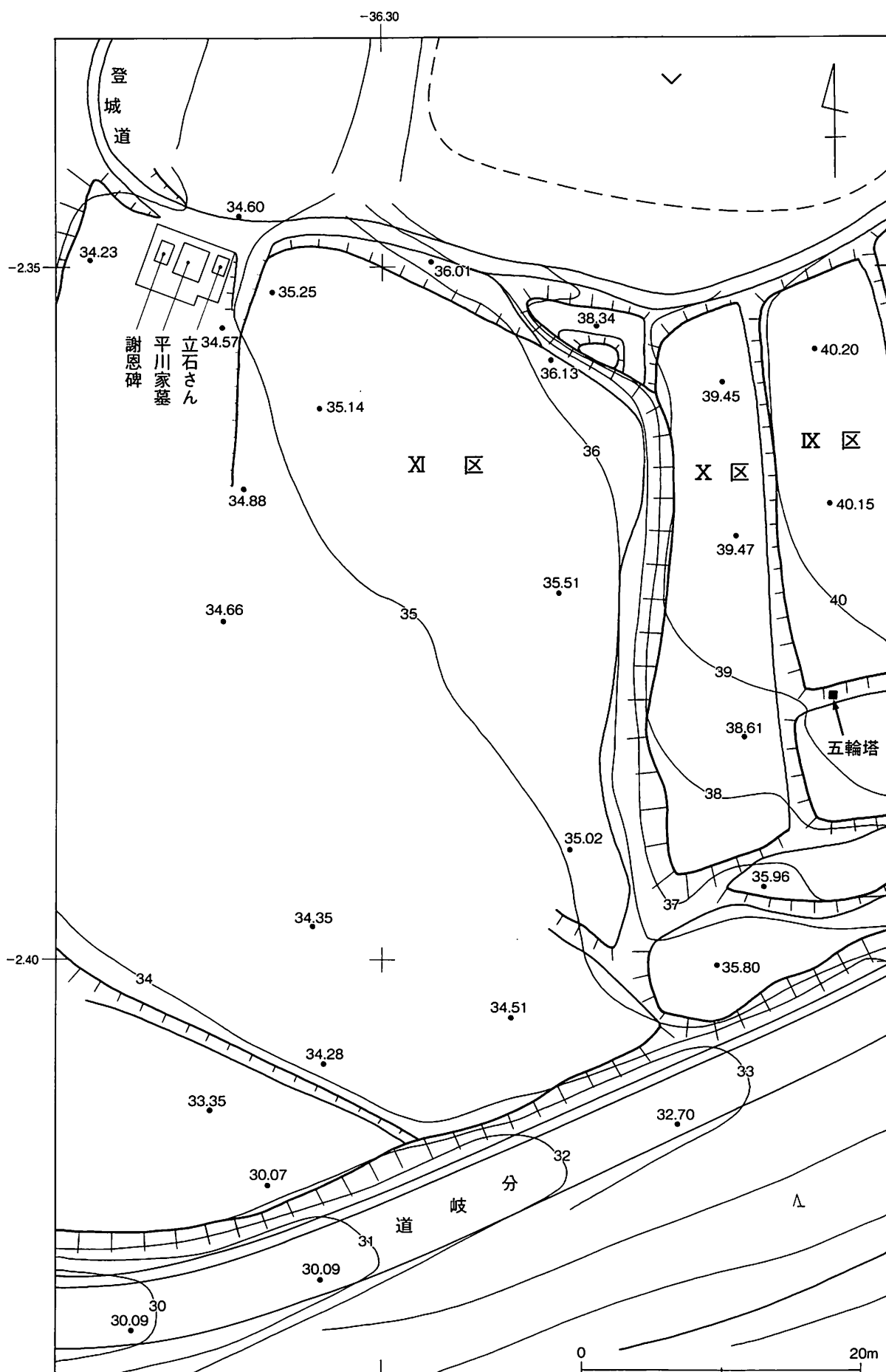
(注4)：「立石さん」石碑の敷地には、近代になって平川家の墓碑が建てられた。



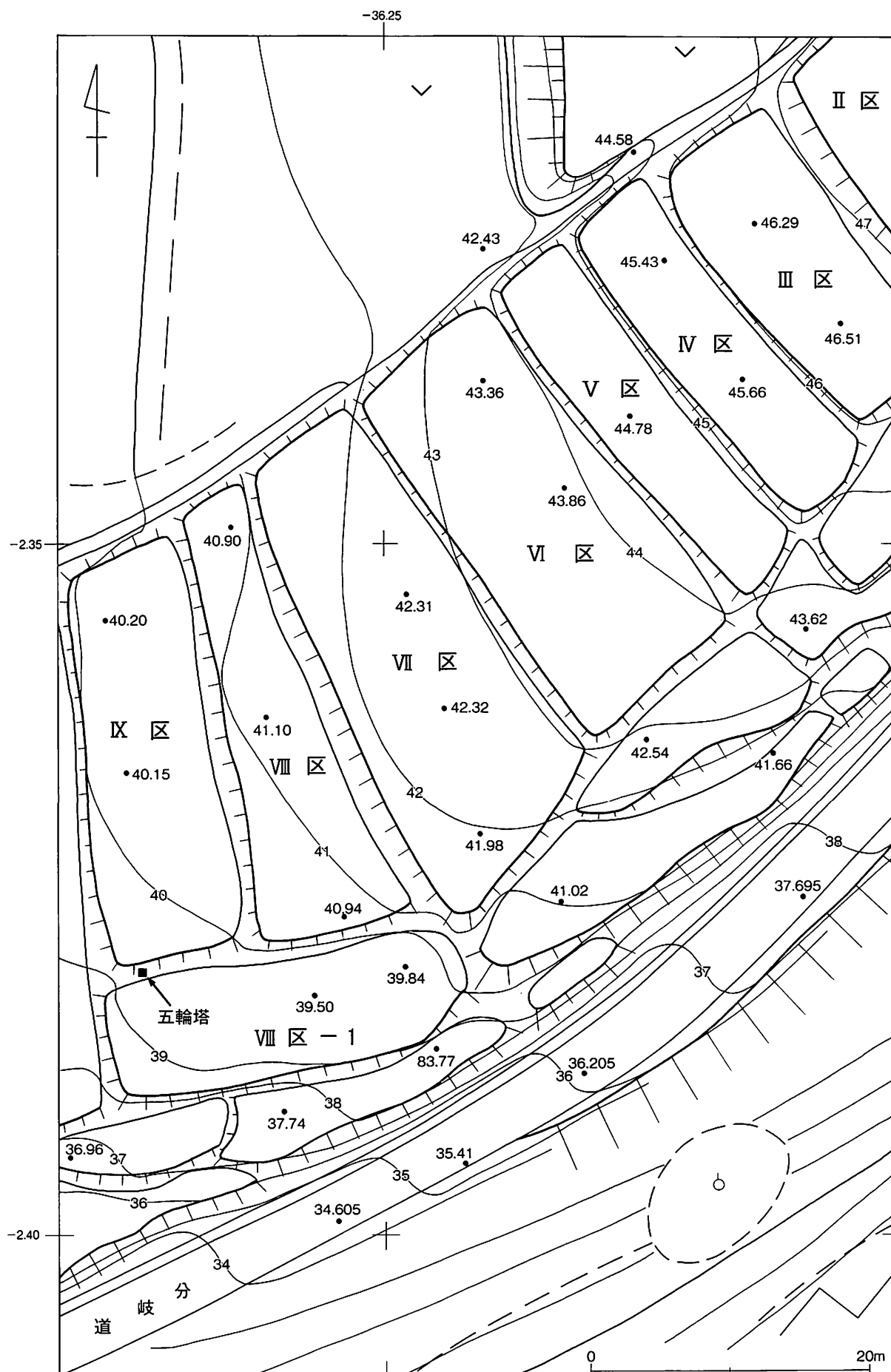
第6図 立石城跡全体測量図



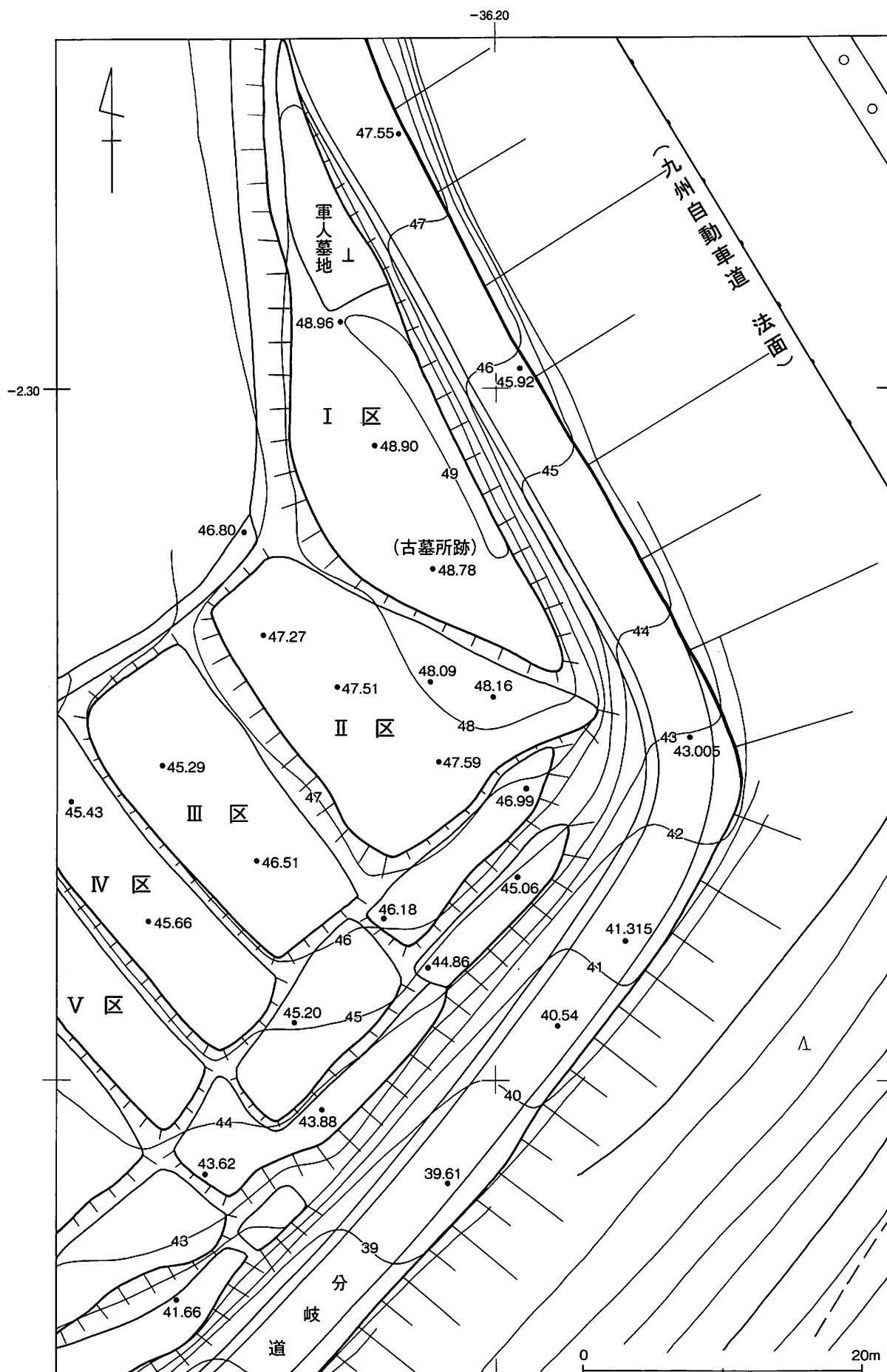
第7図 立石城跡測量図①



第8図 立石城跡測量図②



第9図 立石城跡測量図③

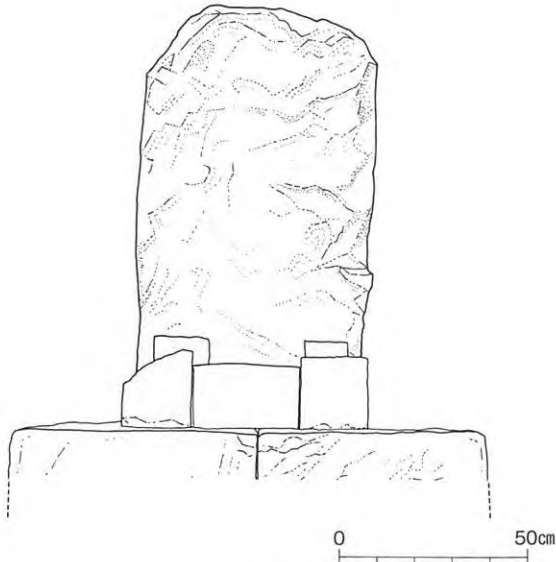


第10図 立石城跡測量図④

〔3〕立石城関連の石塔調査

①立石さん

石碑の本体は、高さ 111cm、幅60cm、厚さ11cm。板碑状をなすが刻字はない。城跡のXI区北西隅に祀られ、毎年11月29日に祭祀が行われる。当日は立石地区の二班「谷組」が取り仕切るが、自動車道対岸の一班「上の原組」から松永俊一氏など四家も参加する。



第11図 立石さん実測図



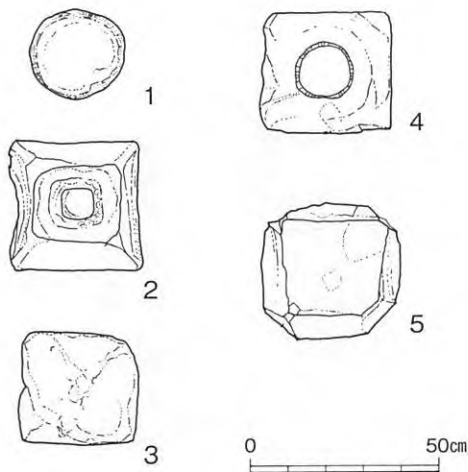
XI区北西隅にある「立石さん」石碑

②五輪塔

城跡のⅧ区-1の角隅に石塔が散在する。五輪塔の残欠も有り、寄せ集めの水輪・火輪・地輪が適当に積まれている。中には地輪に似た2基の加工石もある。

松永ヒサヨさん（89才）談「今は忘れ去られたが、以前はちゃんとした五輪塔が祀られていた」。

1. 五輪塔〔水輪〕 偏平な形で、直径25cm～26.5cm、厚さ10cm。
2. 五輪塔〔火輪〕 一辺34cm、厚さ19cm。中心部に直径12cm～13cm、深さ 8cmの穴を穿つ。
3. 五輪塔〔地輪〕 一辺30cm、厚さ18cm。
4. 加工石 一辺の長さ28cm～35cm、厚さ18cm。中心部に直径18cm、深さ12cmの穴を穿つ。
5. 加工石 製作途中の火輪の样にも思える。一辺が30cm、厚さ18cm。



第12図 五輪塔実測図



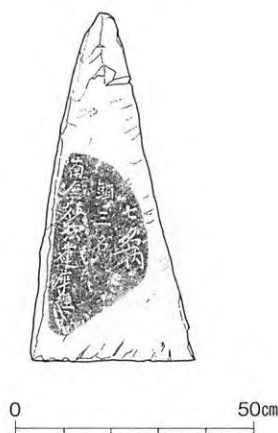
Ⅷ区-1 北西隅法面にある五輪塔

③立石城主の家来の墓

松永俊一氏宅の玄関横にある。高さ77cm、下部幅33cm、鋭角三角形形状の石碑で、石面に「七名内 頭三人 南無妙法蓮華經」の刻字がある。

松永ヒサヨさん談「この石碑は神さんと呼んでいるが、実際はお墓である。立石城主の家来を供養するために建てられた。この家の敷地は立石城時代に寺であった関係で、菊池城から城へ派遣されて来た武士達が寝泊まりしていた。彼らの中から戦死者が出たのでしょう」

正形状の偏平な敷石には「明治三十一年戊十二月三十日立 松永清治」と刻まれている。家来の墓は松永家に伝わる立石城の伝承を元に、この時期、建立されたことが分かる。清治さんは、ヒサヨさんの祖父にあたられる。敷石の刻字は今回の調査で発見した。石碑の下に隠れていたからである。



第13図 立石城主の家来の墓実測図



本体拓本



敷石拓本



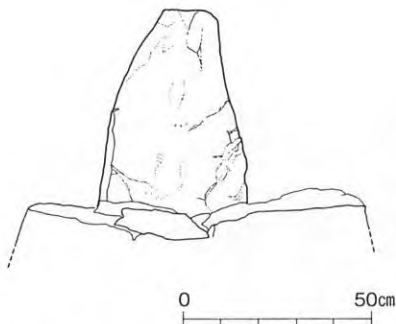
石碑本体部分

④刀研ぎさんの墓

同じく松永氏宅の裏庭にある。石碑の本体は、高さ55cm、上位幅12.33cm、下部幅38cm。やや台形状の石碑で、刻字はない。

松永ヒサヨさん談「立石城にいた刀鍛冶師の墓と聞いている」。

墓の左手に天神さんを祀る石祠があり、側面に「明治二十八年四月二十一日 松永清次」と刻まれている。おそらく「刀研ぎさんの墓」も同時に建立されたのであろう。



第14図 刀研ぎさんの墓実測図



石碑本体部分

⑤下津原東区の石碑

「石原家祖先は立石城主」と刻まれた石碑の本体は、高さ 145cm、幅は中位で50cm、下位で35cmの石碑。享保12年（1727）の建立。この時期、家系図を作成することを生業とする職人が、この地を訪れたのであろう。この事は、享保年間に立石城の伝承が実在していた証拠にもなる。

この石碑の左隣りにも類例のものが祀られている。石碑の裏面に「阿蘇坂梨城主の子孫 坂梨善藏」とある。男性7人が、享和元年（1801）に建立している。下津原地区には石原姓と坂梨姓が多く、両一族が先祖に名を借りて権威づけを行った事が分かる。もっとも時期が74年程ずれるので、坂梨一族が石原一族に後追いついた事になる。おそらく触発されたのであろう。

（注）阿蘇市一の宮町北坂梨に二城跡がある。この内、北坂梨城跡については、『古城考』が城主を阿蘇家臣の北坂梨隠岐（了喜）と記述している。（『熊本県の中世城跡』）



第15図 坂梨城主子孫の石碑実測図



第16図 石原家祖先の石碑実測図



下津原東区の墓地

石原家祖先付石碑



碑文拓本

石原家祖先
立石之城主隼人介十八代
孫新右衛門源承尚
之墓
享保十二年
正月二十三日歿

碑文



石碑本体部分

坂梨一族の祖先付け石碑



裏面拓本



石碑本体（裏面）

（正面） 釋了惠信士
（裏面） 阿蘇坂梨之城主宇治
惟房十一世之孫坂梨善藏
（左側面） 享和元年辛酉歲 男七人
（右側面） 十二月晦日
享年 七十有八没

碑文

〔1〕 内田宮山城跡について

②『広福寺文書』には正平18年(1363)正月20日の玉名東郷久井原四至境注文に「ひさいはらのし、さかいのこと」として「南をかきる田地ハ、ひさいはらのうち うちたさかいハ、うすはなのミちかきり也」とある。「うちたさかいハ」は「内田境ハ」の意味。

④天正10年（1582）、この地は佐賀の竜造寺氏の支配下に入った。同11年7月10日の「竜造寺政家判物」によれば、成富信種の所領「肥後国内内田六町之内田畠三町也」などが、子の菊千代、乙菊丸・万法師丸の三人の母に宛行われている。

①菊水町側から県道3号を南関方面に進み、内田川に架かる内田橋を経て、内田宮前のバス停から右折すると100m程で左手に赤子宮の鳥居がある。鳥居（明治26年10月26日建設）をくぐって急傾斜の石段（64段）を上ると境内に至り、右手に慶応2年（1866）に造られた石製の手洗鉢と、左手に拝殿と神殿の建物を見る。境内は城跡が所在する小山の一角を大きく挟り取り取ったもので、北西側の崖面は地山が直の状態を示す。道路と境内の比高差は9.60m。

第17図 内田宮山城跡周辺地形図および字図

車道が貫いている。規模は長さ18m、幅7mで、主郭との比高差は8.7mに及ぶ。崖面は急峻に削り落とされており、凝灰岩の岩盤が垂直の状態にある。境内との比高差は15.62m。

③山頂は、自動車道の工事によって、約三分の二が失われた（浦田敦實氏談→3頁注1）。残丘頂は、長軸14m、短軸3m～8m、南端に石祠を祀る（伝承はない）。登城道は、急な丘頂斜面の南東隅を九十九折りに上っている。

④小段2は、長方形で、長軸7m、短軸3m。ここに、大五輪塔や板碑が安置されている。これら石塔群の原位置は、自動車道の敷地内にあったという（浦田敦實氏談→25頁）

⑤堀切は小段2の南西下にあつて、肩部に小土塁を積む。堀切は全長17.3m、堀底幅は北西端で1.0m、南東端でラッパ状に開いて3.2m。北西端より長さ5.0mの箇所、円形状の窪地がある。堀切を掘り込んでおり、樹根穴の可能性が高い。土塁は小山状をなし、長さ8.0m、幅は東側寄りで3.8m、西端で2.0m。堀切の中央部との比高差1.1m。

⑥主郭西下の窪地は、長さ11m、北側から南側へラッパ状に開き、幅は南端で5.0m。底部は北から南へ傾斜しており、主郭の西側斜面を大きく抉りとった状態にある。このため、上位部の主郭の西縁は法面のオーバーハングによって、一部が崩落している。窪地の性格は不明。後世に掘られた可能性もあると見る。

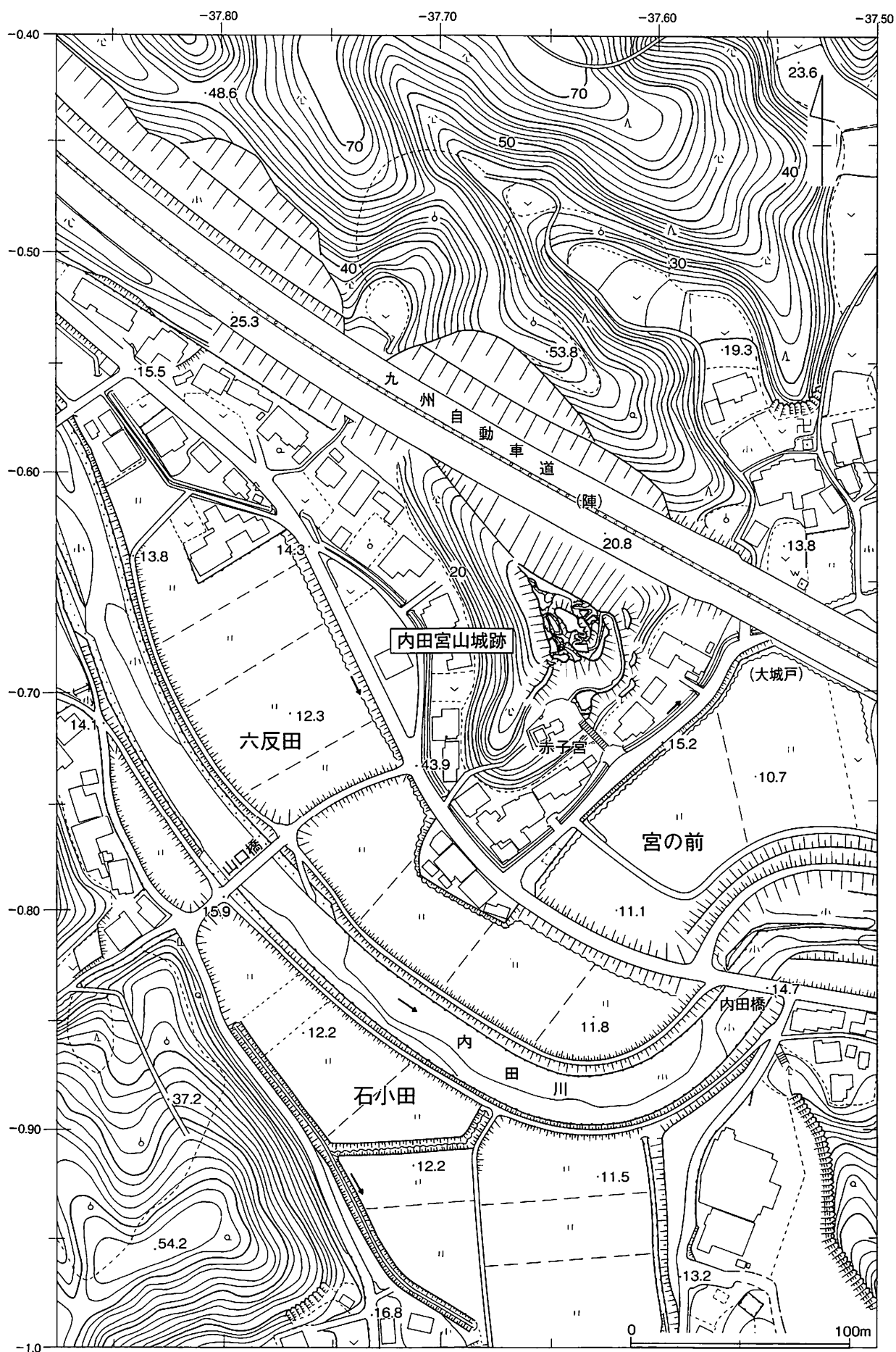
⑦赤子宮の境内は、長軸26m、短軸14～19mの平坦地である。城跡内にあり、縄張りの一部を占めるとされる。山頂部分は狭いので、城跡に関連した主たる建物は、境内箇所に求めざるを得ない。

⑧内田宮山城跡は、規模の面から「村のセンター的な小城」と解釈される。城は南東から南西向きの造りで、裾部に麓集落が形成されていたと考えられる。南西側の水田は「六反田」と呼ばれ、夏季においては泥田堀の役目も果たしたものと考えられる。麓を抜ける県道3号との関連も興味深い。

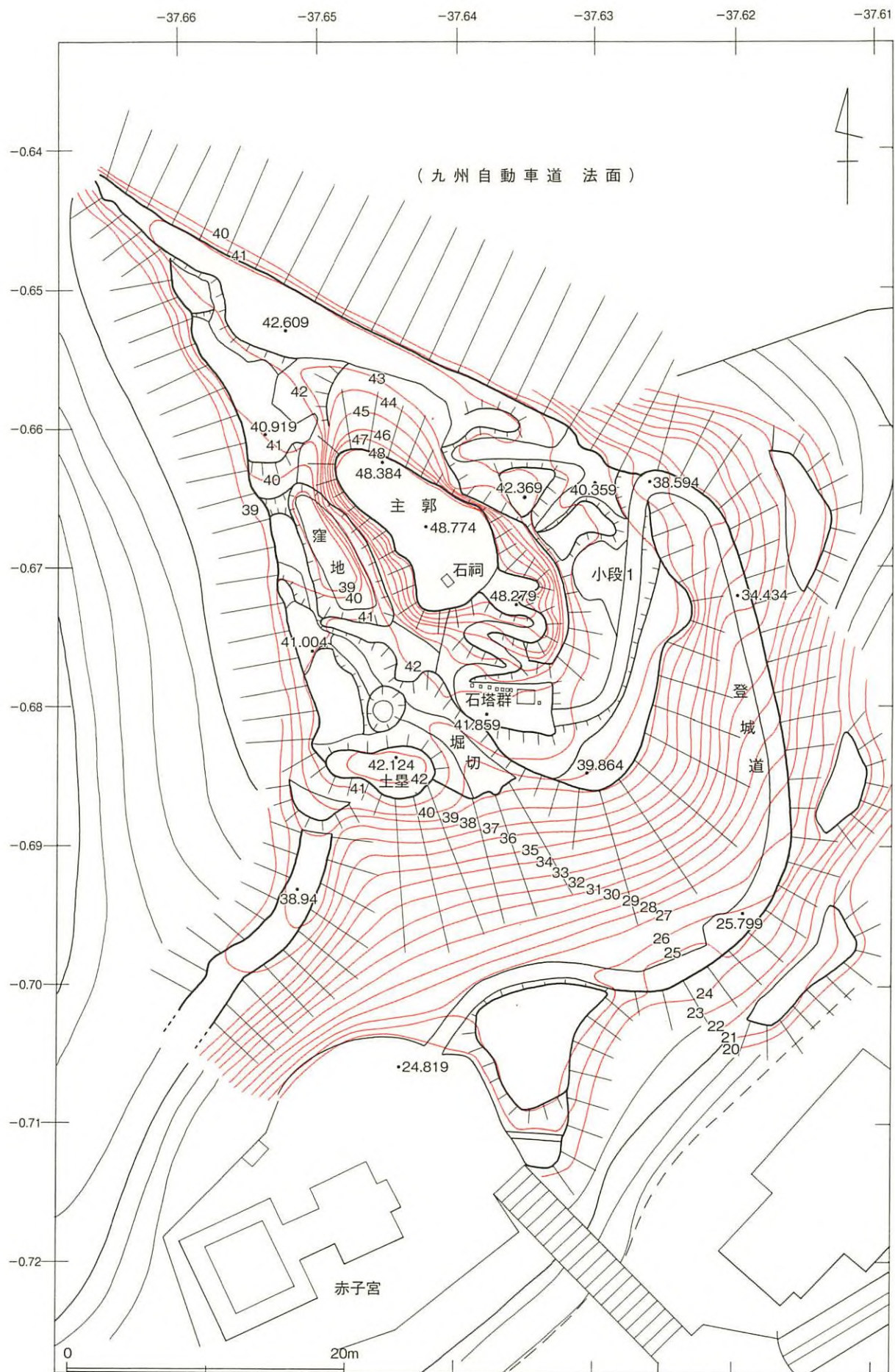
⑨城跡の東方向に位置する内田今城跡は、地図上の直線距離にして600m弱の近距離にある。



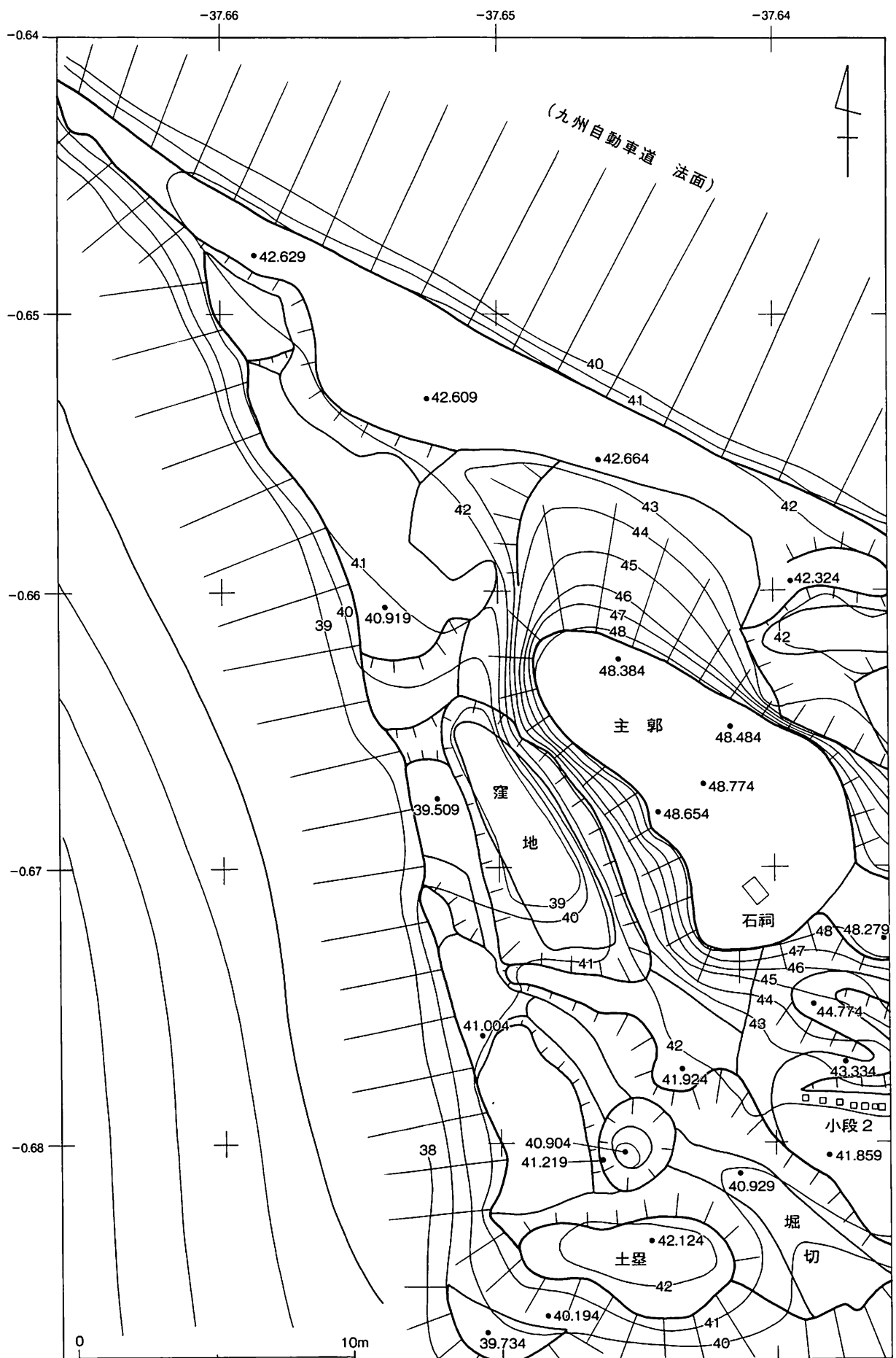
第18図 内田宮山城跡地籍図



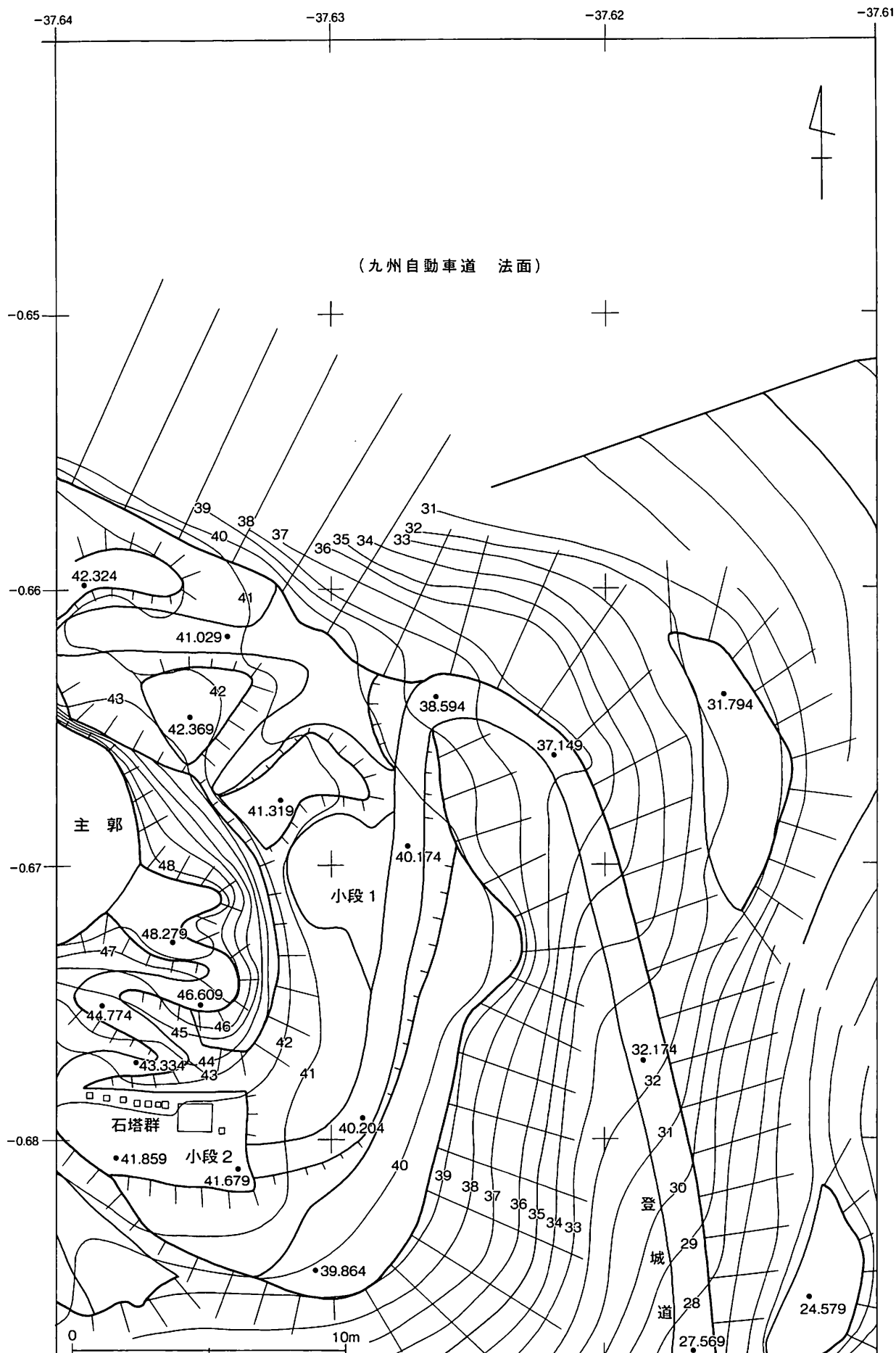
第19図 内田宮山城跡周辺地形図



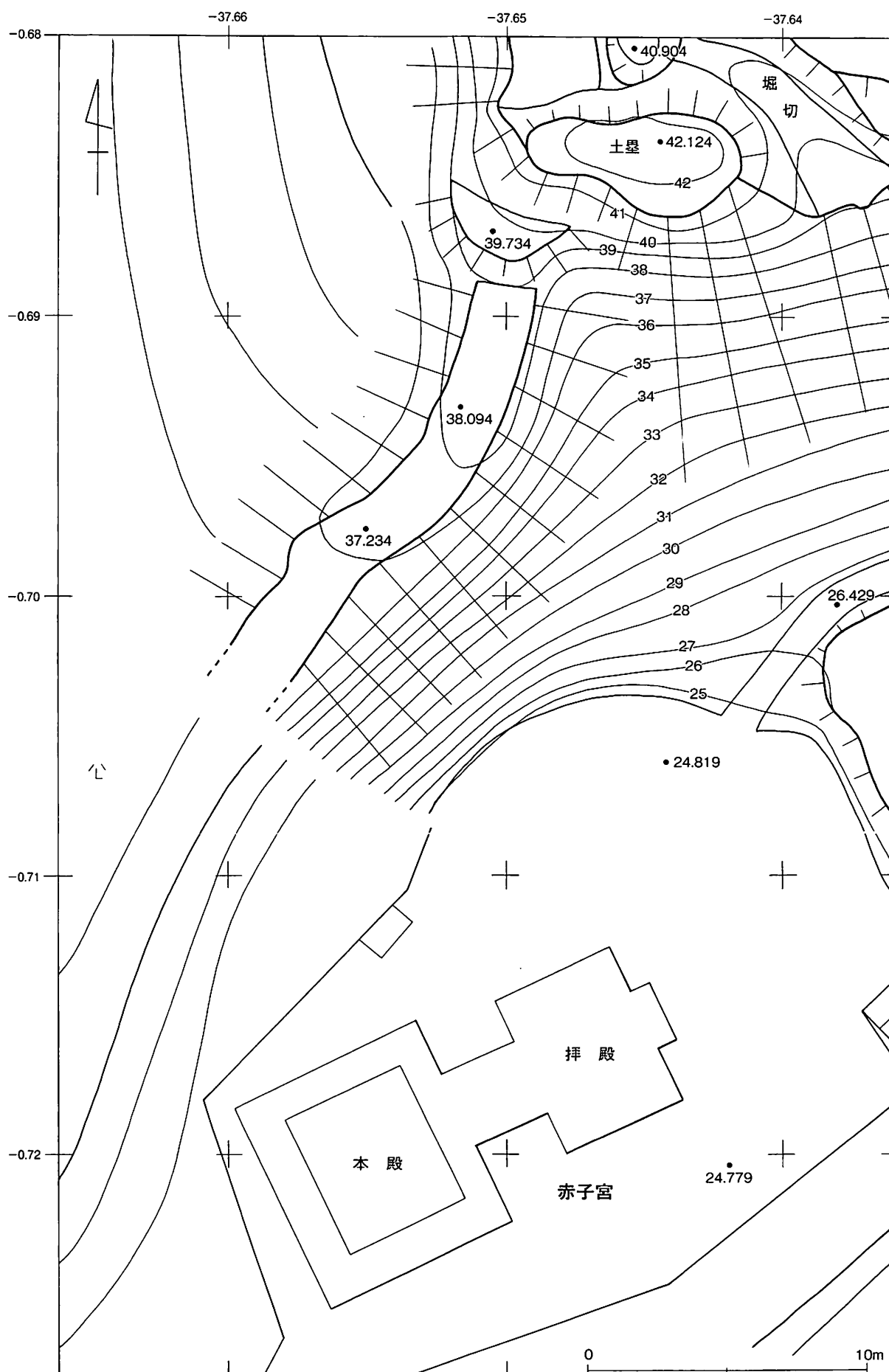
第20図 内田宮山城跡全体測量図



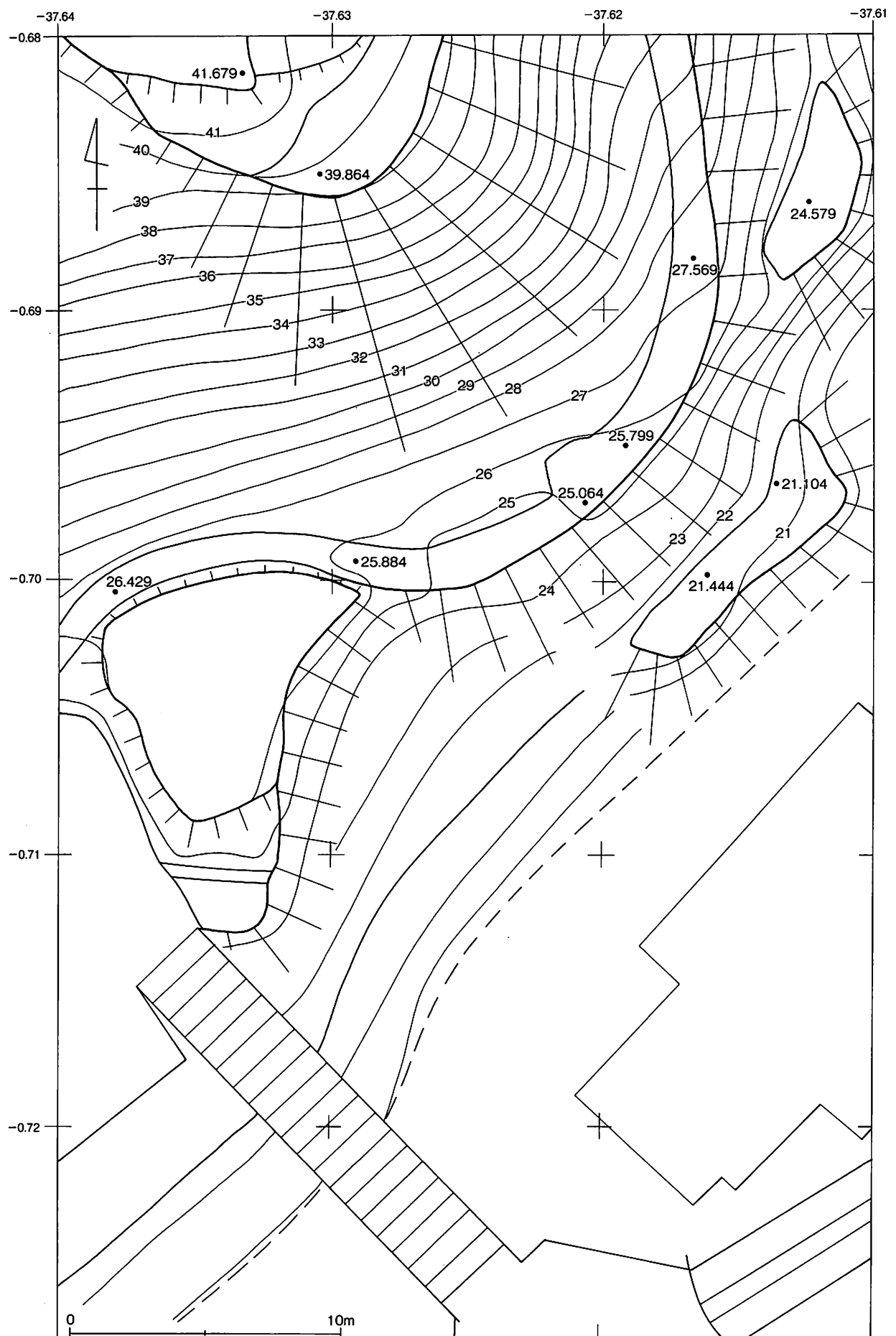
第21図 内田宮山城跡測量図①



第22図 内田宮山城跡測量図②



第23図 内田宮山城跡測量図③



第24図 内田宮山城跡測量図④

〔3〕 城内にある石塔群（大五輪塔・五輪塔・板碑）調査

内田地区在の浦田敦實氏（89歳）の談。「九州自動車道が建設される時に、石塔の移転に携わった。それまでは、城跡の北側山裾にあったが、道路工事でこの地が削り取られる事だったので、現在地へ工事関係者が重機で運んでくれた。移転後、供養をして霊を弔った」。現在地は、城跡の南側直下に位置する小段2である。



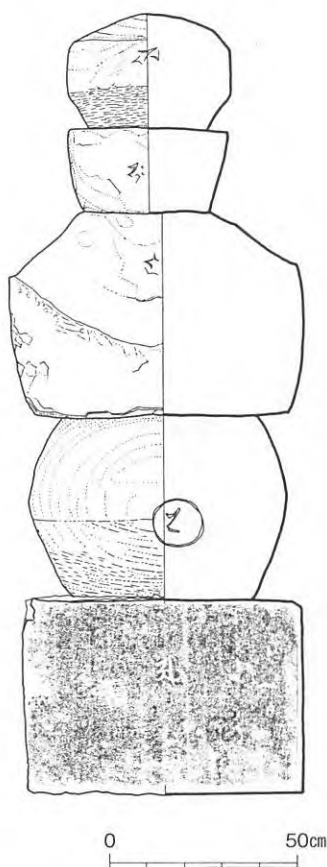
小段2に並ぶ石塔群



第25図 石塔群実測図

※移動後の原型を留めるものは、碑文のある5体（永正十年銘2体・天文八年銘2体・大永二年銘1体）。
 その他は、散在物で、各輪が単に積み重ねられただけのもの。

1. 大永二年（1522年）銘 大五輪塔



道泉禪門 妙祐禪尼 妙意禪尼
 永春禪門 浄光禪門 玄永禪門
 道善禪門 全□禪門 道圓禪門
 妙圓禪尼 正祐禪門 泰仙禪尼
 王因瑤 道意禪門 妙繁禪尼
 松榮秀 源湖禪門 良周禪門
 壽叟椿 眞(ア) 道秀禪門
 春岡樹 正秀禪門 妙金禪尼
 道通禪門 妙香禪尼 □善禪門
 妙椿禪尼 妙正禪尼 道意禪門
 道玠禪門 妙正禪尼 妙金禪尼
 妙金禪尼 道幸禪門 妙金禪尼
 皆大永二年卯月初三日日本□養樹誌之

第26図 大永二年銘 大五輪塔実測図

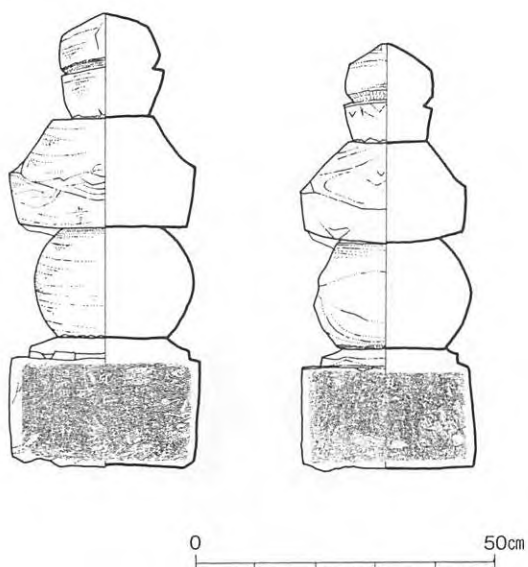
※碑文の判読は、前川清一氏による（『菊水町史』資料編）



大五輪塔〔地輪〕碑文拓本

（石面に細いノミで割り付け後、刻字されている事が分かる）

2. 永正十年（1513年）銘 五輪塔

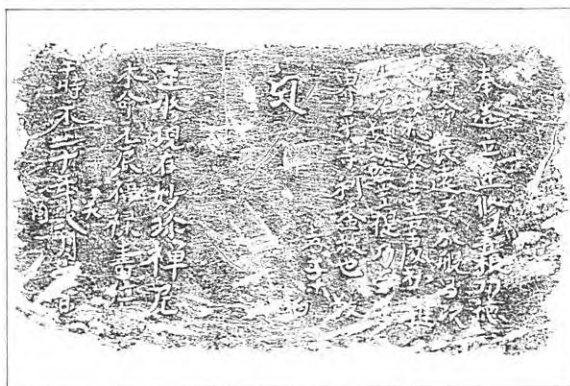


第27図 永正十年銘 五輪塔実測図

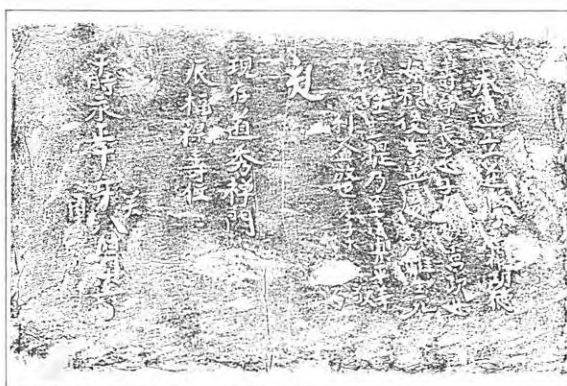


①

②



①〔地輪〕碑文拓本



②〔地輪〕碑文拓本

奉造立逆修善根功德
壽命長遠子孫般昌現
世安穩後生善處 出離
生死頓證菩提乃至法
界平等利益故也
孝子ホ 敬
白
逆修現存妙珍禪尼
本命元辰福祿壽位
干時永正十年 八月六日

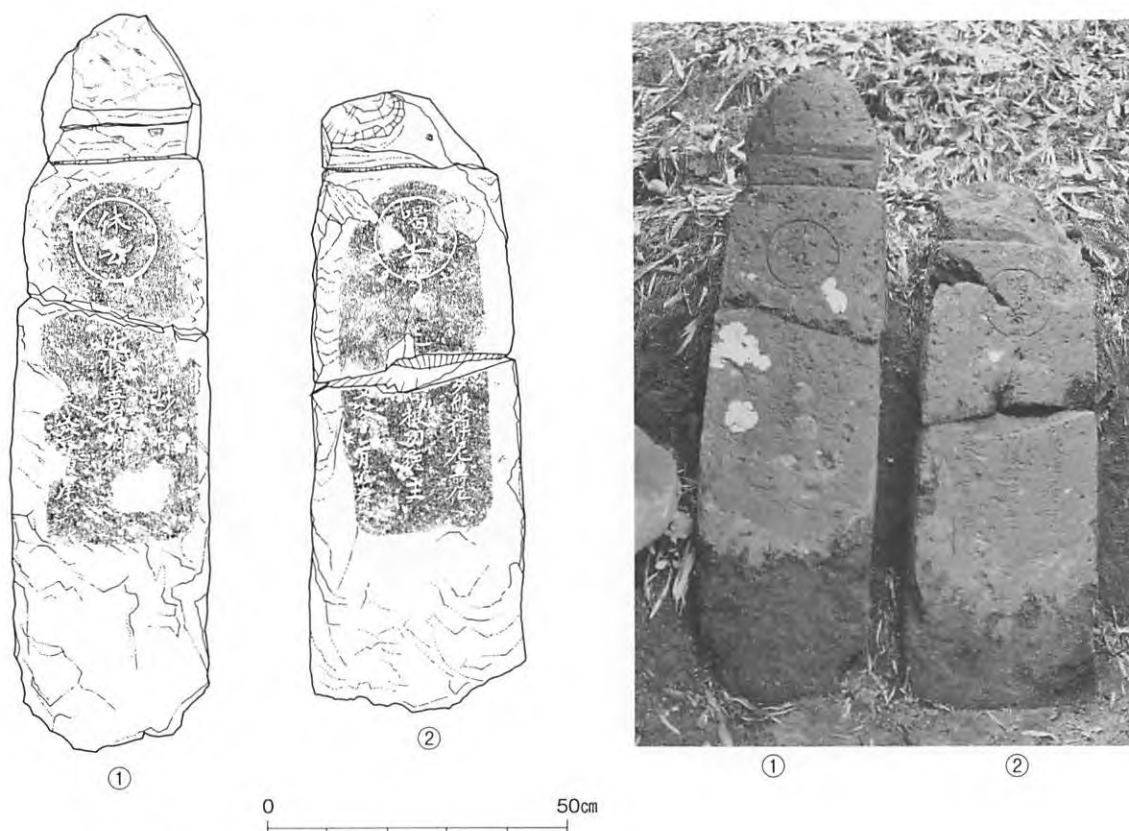
① 碑文

奉造立逆修善根功德
壽命長遠子孫繁昌現世
安穩後生善處出離生死
頓證菩提乃至法界平等
利益故也 孝子ホ 敬
白
現存道秀禪門本命元
辰福祿壽位
干時永正十年 八月六日

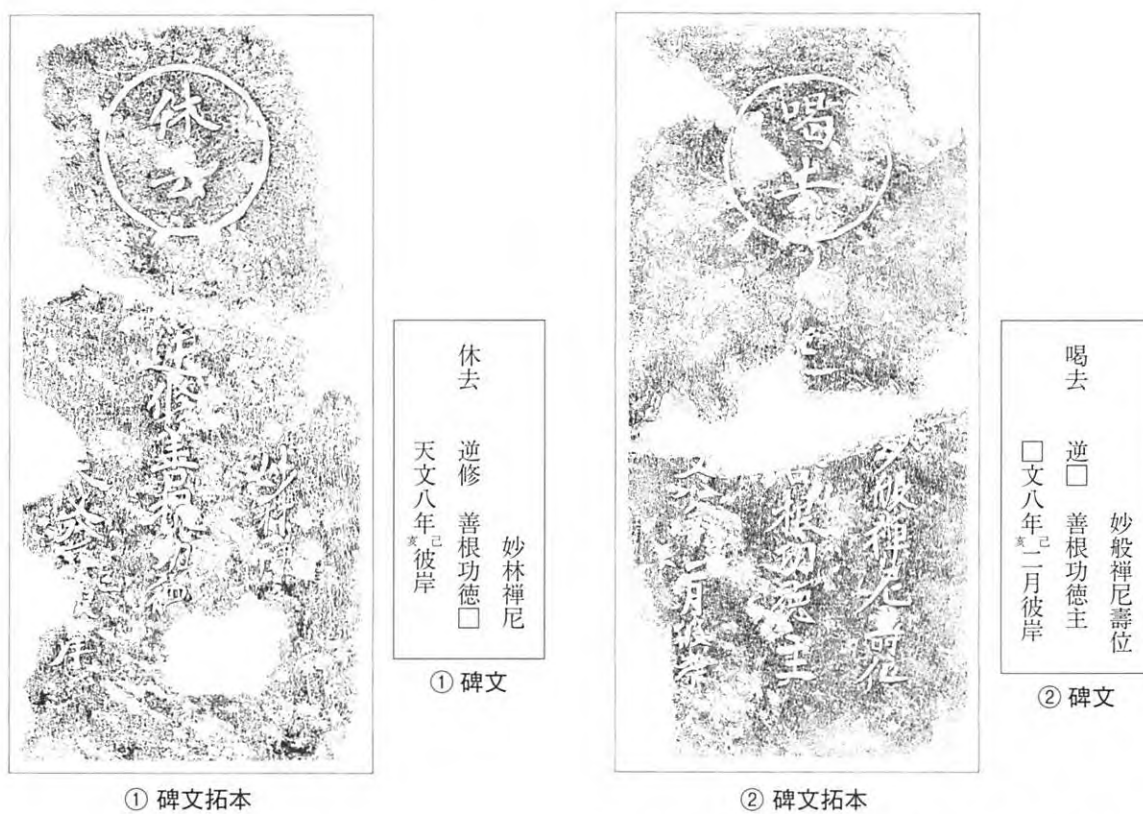
② 碑文

※碑文の判読は、前川清一氏による（『菊水町史』資料編）

3. 天文八年（1539年）銘 板碑



第28図 天文八年銘 板碑実測図



※碑文の判読は、前川清一氏による（『菊水町史』資料編）

第Ⅲ章 ま と め

立石城跡^{たていし}と内田宮山城跡^{うちだみややま}は、城域の中心部を九州自動車道が通り抜けたので（昭和40年代の後半）、今日、元々の縄張りの把握が困難となっている。地元でも「両城跡は、自動車道建設の際に壊された」との認識が強く、県の『熊本県の中世城跡』（昭和53年3月発刊）でも、資料を提供された地元調査員の興味が薄く、簡単な報告に留まっている。その意味で、腰を据える事ができた今回の取り組みによって、新たな発見や再認識したことも数多く、調査者にとって、大きな喜びであった。

1. 立石城跡

①中規模な平山城である。丘頂部分を僅かに残し、北東部の鞍部^{あんぶ}（城跡地から延びる本体丘陵地の括れ部）までを失っている。地元では残存の丘頂部分から南西側へ下る丘陵ライン（山で言う尾根筋）を「野付^{のつけ}」と呼び、「立石城跡」と伝えてきた。

一方で、城跡地から見て、段下がりの丘陵地の北域は、広い緩傾斜地となっている。この区域は、全面、畑地に利用されており、城跡地としての伝えは残っていない。畑の区割りも城跡内のそれとは異なり、南北方向に長軸を有する幅広の帯状のものとなっている。城跡の一部のようにも感じるが、現地に立てば緩慢な地形で、城外との認識に至る。一方で、「野付」は、まさに山という状況を呈して、城跡にふさわしい地形をなす。畑地とは景観を全く異にする。

②自動車道で断ち切られたが、城跡の外縁部は、立石地区の「上の原」地域まで拡大し、麓集落そのものは、立石地区の通称「谷^{なに}」地域に求められる。

③城跡関連の石碑は「立石城の伝承」を裏付けるものである。「立石さん」石碑の建立は、少なくとも江戸時代に遡り、下津原東区^{しもつばらひがし}の石碑を誕生させることになった事は確実である。明治時代後半に建立された「家来の墓^{かたなとのむす}」や「刀研ぎさんの墓」も、松永家で代々語り継がれてきた「立石城伝承」が源になったものと解釈する。

④立石地区の「谷」地域の石原一族の伝承も興味深い。石碑の存在と合わせ、立石城跡は、廃城後も伝承の中で生きてきた事を示す。この点において、同じ（旧）菊水町の小乙城^{こおとぎ}・乙城^{おとぎ}などとは、性格を異にする（これらの城は伝承を持たない）。下津原東区の石碑と共に、広範囲にわたる伝承は、城としての価値を高めるものである。

2. 内田宮山城跡

①小規模な平山城で、平時においては、まさに村のセンター的な役割を果たしたものと思われる。一方で、有事となれば城の裾部に展開する内田の麓集落を全面的に取り込んだ総構えの縄張りで、対処することになる。

②平時には、季節の変わり目や祭日に、館主が領民と城の山頂で酒を酌み交わした光景が目に見え、この事は、中世城研究者の伊藤正義氏（文化庁調査官）が提唱する「平時における中世城の存在の仕方」そのものである。

③内田宮山城の様な小城^{こじろ}は、センター的な役目が色濃いものであった事が考えられる。基本的には、江戸時代の「一村一寺」にあたり、中世では「一村一城」の路線に沿った在り方と解釈する。元々、城の本質は村のシンボリックなもので、心の拠りどころであったと見なされる。そうでなければ、城は維持できない。

一方で、前述の様に、有事の際には、麓集落と一体とならなければ、敵からの攻撃に耐えられない状況にある。この点から、城そのものを面的に捉え、複数の集合体（城）で面としての防衛網を形成する事になる。 「城＋麓集落＋複数城→面の支配」との見方である。

④城は所詮、「戦の副産物」であるとの解釈は不動のものである。しかし、当該の城跡を見ると、有事対策だけの施設とは到底、理解できない面が生じるのも真実である。そこで、この隙間を埋めるものが、前述の村のセンター的役割である。

⑤「大城戸」・「陣」・「六反田」の地名に加え、大永年号を刻む大五輪塔などの一連の石塔群は、城跡を核としたミクロ的な中世社会の復元に際して基礎資料となり得る。当地は、戦国時代後半に、佐賀の竜造寺氏の勢力下におかれた史実がある。しかし、元来は、内田氏の支配する所であった。内田氏の存在を示す大五輪塔が、城の鞍部の谷部に存在していたのも興味深い。代変わりの際に、城の裏側にあたる谷間に押し込められた可能性もある。そう考えなければ辻褄が合わない。この類の供養塔は、シンボリックなもので麓集落の目立つ所におかれて当然である。しかし、現実には、そうで無い所に存在した事に歴史の裏面を感じる。繰り返すが、城跡内の小段に安置されている石塔群は自動車道建設の際に移転されたものである。この事は、今回しっかりと調査報告書に書き留めた。年の流れと共に、この様な出来事は人々の記憶から薄れて行くからである。

〔あとがき〕

町史編纂室に町教委の居石裕臣^{すえいし}さんがいる。非常に珍しい姓で、彼に問うたところ、「菊水町では、内田地区に限られます。県内でもほとんど同姓の方がいません。何でも、佐賀に多い姓だという事です」。これを聞いて、天正十年に内田地区が、佐賀の竜造寺氏の支配下に入った事を思い出した。おそらく、この史実と関連があらうと思う。

類例はある。下益城郡美里町に所在する堅志田城跡は、天正時代の後半に薩摩の島津氏の配下に入った事がある。今日、町内の堅志田地区には有水姓の方がいる。この姓も、元々は薩摩地方に多い姓である。

このことを居石さんに伝えたと、彼は大いに喜んだ。推論の域を出ないが、歴史の掘り起こしの楽しみは、この様な発見にある。

写 真 图 版



図版 1 立石城跡 遠景 北東側の上の原地区から望む



図版 2 立石城跡 北側の畑地から望む



図版 3 立石城跡 XI区北東隅 南→北



図版 4 立石城跡 XI区東側法面 北→南



図版5 立石城跡 XI区 東→西



図版6 立石城跡 「立石さん」に上る登城道



図版 7 内田宮山城跡 遠景 南東側から望む



図版 8 内田宮山城跡 主郭平場 北側から望む



図版 9 内田宮山城跡 主郭東下 小段1 北→南



図版10
内田宮山城跡 主郭東下壁面(岩盤の削り落とし)



図版11 内田宮山城跡 主郭南下 小段2



図版12 内田宮山城跡 主郭南端から南西下の堀切と土塁を望む



図版13 内田宮山城跡 主郭北下 南東→北西



図版14 内田宮山城跡 小段2に安置されている石塔群

報 告 書 抄 録

書 名	立石城跡・内田宮山城跡
シリーズ名	和水町文化財調査報告 第1集
編 著 者 名	大田幸博 益永浩仁
編 集 機 関	和水町教育委員会
所 在 地	熊本県玉名郡和水町江田3886
発行年月日	2006年3月31日

所収遺跡名	所 在 地	調 査 期 間	調査原因
立 石 城 跡	熊本県玉名郡和水町大字原口字野付	2004年4月～2005年5月	学術調査
内田宮山城跡	熊本県玉名郡和水町大字内田字宮脇	2005年6月～9月	学術調査

遺 跡 名	主 な 遺 構
立 石 城 跡	・九州自動車道に城跡の東側を削り取られている。 ・東から西への緩傾斜地に11段の階段状地形。 ・Ⅺ区西端部平場に「立石さん」、Ⅷ区－1南西側法面に五輪塔の残欠。 ・立石城関連石碑の調査（上の原地区・下津原東区）
内田宮山城跡	・九州自動車道に城跡の東側を三分の二程削り取られている。 ・主郭壁面の削り落とし・堀切・小段・土塁 ・小段2には、自動車道建設工事の際に移設された石塔群がある。 *大五輪塔 大永二年銘（1522年） *五輪塔 永正十年銘（1513年） *板碑 天文八年銘（1539年）

和水町文化財調査報告 第1集

立石城跡・内田宮山城跡

平成18年3月31日

〔編集発行〕

和水町教育委員会

〒865-0192 熊本県玉名郡和水町江田3886

☎0968-86-3131

〔印刷〕

西本印刷

〒861-2241 熊本県上益城郡益城町宮園564-2

☎096-286-4151

